

元駐ルーマニア大使小崎昌業氏オーラルヒストリー（三・完） —アジアへの経済協力とアメリカとの繊維交渉

金子 貴純

はじめに

本稿は、元駐ルーマニア大使小崎昌業氏オーラルヒストリーの最終回にあたる¹。今回は、東京に戻って以降、東南アジアやアメリカを舞台に奮闘された日々が話題の中心となる。

カナダ大使館での勤務を終えた小崎大使は、外務省本省の経済協力局に配属された（1965年11月）。当時の日本にとって、東南アジア諸国との関係構築を図る上で、経済協力は重要な課題であった。小崎大使は、調査団を率いて現場を回り、地域経済の発展の地ならしに尽力したのである。その過程で大使が目にしたのは、現地の発展に身を投じた日本人の姿であった。大使のお話しは、戦後の日本と東南アジア諸国との関係の礎は、そういった人々の地道な努力により築かれたことを我々に教えてくれる。

現場を駆けまわる日々を送っていた大使に、その後、病魔が襲いかかる。しばしの休養の後、文化事業部を経て配属されたのは、通産省繊維雑貨局であった（1971年1月）。繊維交渉をめぐり、日米両国間に不穏な空気がただよう中、繊維雑貨輸出課長の重責を担ったのである。ここで語られるのは、米国と国内業界双方からの圧力にさらされながらも、交渉の着地点を求めて苦闘した外交官の姿である。

戦前の行為の清算を主眼としたアジアへの経済協力と、戦後に経済大国として復興する過程で生じた摩擦の調整を目的としたアメリカとの繊維交渉は、戦前から戦後にかけての日本の国際的立場の変動を象徴する外交課題であった。本稿で語られる内容は、その経緯を生き活きと描写してくれる貴重な証言である。

インタビューの最終回に至るまで、小崎大使のお話しから一貫してにじみ出

¹ 前回までの内容については、金子貴純「元駐ルーマニア大使小崎昌業氏オーラルヒストリー（一）—青島・上海・南京時代から外務省入省まで」『大東法政論集』第26号、2017年）および「元駐ルーマニア大使小崎昌業氏オーラルヒストリー（二）—中華民国・インド・カナダ時代」（同第27号、2018年）を参照されたい。

ていたのは、青春時代を過ごした東亜同文書院への尽きない愛情と、「約一世紀にわたり関わってきた」（小崎大使）と語る中国への関心であった。

末尾になるが、快くインタビューに応じてくださった小崎昌業大使に改めて感謝申し上げる。また、このインタビューの設定に御尽力いただいた、愛知大学東亜同文書院大学記念センターの武井義和先生と、全回にわたり場所を提供してくださった愛知大学東京霞が関オフィスの夏目益良所長にこの場をお借りして感謝の意を表したい。

インタビュー内容

（以下、〔 〕で記載している箇所は筆者が適宜追加した内容を示す）

第5回

・日時：2015年2月25日 14:00～16:00

・場所：愛知大学東京霞が関オフィス

・インタビュアー

武田知己（大東文化大学法学部教授）

金子貴純（大東文化大学大学院法学研究科博士課程前期課程）

■ インドにおける経済協力活動の進め方

—— お話しをお聞きするのも5回目になります。今日は、繊維交渉を中心に聞かせたいと考えております。よろしく願いいたします。

その前に、前回の補足から入りたいと思います。カルカッタ総領事館におられた際〔1960年10月 - 1963年10月〕、他の省庁との連携はどのようにとっておられたのでしょうか。例えば経済協力などは、農林省をはじめ他の省庁との連絡が必要になると思うのですが。

小崎 外務省の組織から言いますと、インドであるプロジェクトをやる場合には、現地の大使館や総領事館が最初に手をつけます。両者が中心となって、できるだけプロジェクトを深めていく。私の場合は、大使館と連絡をとりながら、大使等が視察にきた段階でプロジェクトの内容の話しをしました。私は総領事館にいましたから、他省庁というよりは、大使館と連絡をとってやる、という形をとっていました。

ところで、経済協力には有償資金と無償資金の二つがあります。その二つのどちらかを用いて経済協力を実施するのですが、大抵はインドの大使館との連絡ばかりで、他の省庁や外国と連絡をとるということはまずなかったですね。私が独自にカルカッタ総領事館の管轄区内の調査に行ったり、あるいは大使館の人と一緒に視察に行ったりしていました。

— インドの総領事館であれば、現地の大使館と連絡をとりながらやっているのですね。

小崎 ええ。

— インドの大使館には、外務省以外からの出向者もいらっちゃったから、そこで連絡がとれるわけですね。

小崎 そうです。

■ カナダ時代の広報活動

— 続いてカナダ時代〔1963年10月 - 1965年11月〕のお話しの補足ですが、現地の日本人が講演に協力してくれていたというお話しが前回にありましたが…。

小崎 それは日本人というよりカナダ人です。毎回、責任者は変わっていました。

— どういう方だったのですか。

小崎 いろいろなクラブの責任者ですね。一緒にお昼を食べてわいわい言って、食事が終わってから、その人から「今日は日本大使館から、日本の現段階におけるカナダへの進出状況について話してもらいます」といった形で紹介されました。だいたいそういう形式ですね。場所は、学校や教会、ロータリークラブなど、いろいろでした。夜にやる場合もあった。

— 新聞などジャーナリズムは協力しなかったのですか

小崎 ええ。あの頃のカナダは、日本との接触はあまりなかったですからね。それでも、カナダでの一連の広報活動が、実際に日本の進出に効果があったのかというと、大いにあったのです。先日も申しましたが、私は日本から来た学生を連れて一緒に回ったこともありましたが、車に日本のパンフレットなどを積んで、行く先々で宣伝活動をやりました。後には、「私がやります」とある学

生が言って、西から東までずっと回ってくれました。非常に助かりました。

— その方のお名前はなんとおっしゃるのですか。

小崎 名前は何だったかな、忘れてしまいました。

— 当時カナダに留学されていた方ですか。

小崎 そうです。

— 外務省が、現地に留学している日本人にそういった講演をしてもらうことは一般的だったのでしょうか。

小崎 国によって違います。非常に身边が危ない国ではそんなことはやっつけられません。

■ 本省への赴任—アジアへの経済協力に従事

— では次に進みたいと思います。カナダから日本に戻られて、外務省本省の経済協力局に異動されていますね。1966年、昭和41年でよろしいでしょうか。

小崎 昭和40年、1965年11月ですね。経済協力局の賠償課に配属されました。当時は、経済協力局の中に賠償課というのがありました。『外務省の百年』という本によれば、昭和44年には、経済局は政策課、国際協力課、技術協力課、経済協力一課、二課、それから経理課から構成されております。私が移った昭和40年には、賠償課という課があったのですね。

当時は、賠償というものは重要な意味をもっていましたから、忙しい課でした。賠償課にいるときに、経済協力関係の調査団を東南アジアに出しまして、私も5カ国に行きました。

— それは賠償関係の調査団ですか。

小崎 そうです。

— 大使はこれを組織される側ですか、一緒に行かれる側ですか。

小崎 一緒に行きました。上には大使がいましたが、私は次席で行きました。賠償課には大蔵省から出向している人もいて、その方も一緒に行きました。行った国は、フィリピン、タイ、カンボジア、インドネシア、ビルマです。ずいぶん山の中にも入りました。賠償問題に関してはもう終わりの頃でしたが、水力発電などのプロジェクトが残っていました。

—— 賠償課のお仕事は具体的にどのようなものだったのでしょうか。

小崎 対象国によって違います。例えばカンボジアだったら、水田の米をいかによく獲れるようにするかとか、そういうことに取り組みました。だから、田んぼに行って、種まきから米を収穫する過程まで全部教えましたね。実際にそれをやるのは協力隊の人たちですが。

—— 大使のお仕事は、協力隊をコーディネートしたり派遣したりということでしょうか。

小崎 そうです。

—— 技術協力課とはどういう関係になるのでしょうか。

小崎 それは密接な関係があります。私は賠償課から技術協力課長になります〔1967年1月〕が、まだ残っていた案件をやりました。特に私が注意してやったのは、インド時代に行ったブータンに関する協力です。ブータンに関しては機材供与など、いろいろなことをやりました。技術協力課というのは機材供与をやる場所です。あとは人間の派遣や受け入れなどですね。

—— 人材派遣もやるのですね。

小崎 そうです。

—— では技術協力課が海外青年協力隊を所管されているのですか。

小崎 ええ。技術協力課が JICA を所管しているのです。

—— 当時から JICA はあったのですか。

小崎 あの頃からありましたよ。何かあると私たちはすぐ駆り出されました。外務省の中では、経済協力局の予算額が一番大きいのです。JICA の予算をやっていますから。本省の局の規模も大きかったですね。

時代が下って外務省の組織編成が変わってくると、下にあった外郭団体も変わってくる。名前が変わるなどということがよくありました。例えば、私は後で経済協力局から文化事業部に行きましたけど、文化事業部の下には外郭団体は何もなかったです。文化事業部には文化二課というのがあって、そこで文化関係、スポーツ関係、学者関係、日本語の研修など全部やっていて、毎日それこそ千客万来なんです。こういった状況では本省の仕事はできないだろうということで、文化事業部時代に国際協力基金を作りました。

—— 大使は JICA 設立には関わられたのですか。

小崎 直接にはタッチしていません。

— 国際協力基金を作る際には直接タッチされたのですか。

小崎 それも直接はやっていません。

— 外務省で技術協力を熱心だった方々というのは、何か系譜といますか、キャリアパターンのようなものがあつたのでしょうか。

小崎 まあ、みんな同じような考えでやっていましたからね。特に技術協力を詳しい方というのはいなかったですね。一生懸命で熱心に行っている方もいたし、いい加減な人もいました。

— 例えばこの後話題にする繊維交渉では、牛場信彦さんなどが中心的に取り組まれたのだらうと思います。あるいは中国問題であれば、岡田晃さんや橋本恕さんが中心だったと思います。経済協力ですと、どなたが中心ということになるのでしょうか。

小崎 「経済協力といえばこの人」というのは言えないですね。

— 例えば、外務省の稲田繁さんは、『インドネシアの総合開発計画について』という本を当時書かれています²。また、私たちが戦後のインドネシアを研究する時に必ず読む『インドネシアの横顔』という本もお書きになっています³。稲田さんのような方が、外務省で経済協力を熱心に取り組まれたと考えてよろしいでしょうか。

小崎 熱心な人はいましたよ。必死になってやってくれる人がいれば、それだけ本省も力をいれますからね。

— 1967年の5カ国の調査団について、具体的に何か覚えていらっしゃることはございますか。

小崎 ビルマでは水力発電や道路の開発、それからトラックの生産などがありました。私が日本に帰ってから、外務省に報告したものが本になっています⁴。それは田舎の蔵の奥にあってどこにいったかわかりません。帰ったら探そうと思っているのですが。

² 稲田繁『インドネシアの総合開発計画について』（経済団体連合会、1961年）。

³ 稲田繁『インドネシアの横顔』（日本国際問題研究所、1966年）。

⁴ 1967年以降に外務省経済協力局が編纂した経済協力に関する著書として、『賠償及び無償経済協力の実施状況』（外務省経済協力局賠償課、1967年）や『ビルマ経済協力調査団報告書』（外務省経済協力局、1972年）がある。

— 実際に個別具体的なプロジェクトの調査、進捗状況をみるのでしょうか。あるいは、足りないところがあれば提案などもなされたのでしょうか。

小崎 そうですね。

— この調査を終えられた後、技術協力課長になられるのでしょうか。

小崎 そうです。

— 技術協力課長になられるのは67年以降ですね。具体的におわかりになりますか。

小崎 昭和42年1月以降ですね。

— 技術協力課長になられて、仕事が大きく変わったわけではないのでしょうか。同じ局ですし…。

小崎 ええ。同じ局ですからね。

— 技術協力課長時代にブータンの経済協力などを一生懸命やられたのですか。

小崎 その前ですね、インドのカルカッタ総領事館にいた時に、ブータンを歩いて調査して、こういうことをやったらいいのではないかと色々と報告したのです。すると東京で認めてくれて、色々と考えてやってくれました。それが実現するのは、私が技術協力課長になってからですから、ずっと後のことでしたが。

— ブータンでのプロジェクトは、機材を送るのが一番大きな仕事でしたか。

小崎 そうですね。

— 何の機材ですか。

小崎 農業の機材です。その後は人を派遣しました。西岡京治さんです。もう亡くなりましたけど、現地に28年もいて、一種の王族に類するような扱いを受けていました。何か用があると、王様のとなりに座って、食事をしたりしていました。あの方が亡くなってから、ブータンの行き方は多少変わったかもしれないけれど、大きな方向付けはそんなに変わっていないと思います。「幸福の度合い」なんて、最近言われていますね。

— 幸福度世界一ですからね。

小崎 私たちが行ったところは、ブータンという国はまあ本当にお粗末な国でしたよ。それが今はこんなふうになって、私自身がびっくりしています。

— その現地にいた西岡さんという方は、どういう立場の方だったのですか。外務省が派遣したのですか。

小崎 外務省が派遣しました。現地からの要請があって、この人がいいなど。あの方は、大阪で学校の先生をやっていました。それから現地に行って、いろいろ考えて外務省に要請した。種や機材など、あらゆるものを送ったのだと思いますよ。私たちが行ったころは、ブータンの国内でとれるものなど何にもなかったのです。それこそ動物からとれるようなものしかなかった。それが、最近では立派な果物ができて、インドに輸出したりしていますからね。それは王様が幸福度を口にするのも無理はないと思いますね。

— その方には外務省が給料を支払うのですか。

小崎 ええ。

— そういうふうに技術協力がなされていたのですね。何年も何十年もやられていた…。

小崎 何十年ですね。でもああいう方は珍しいですよ。まあ JICA でも人を派遣していますけれども、任期は2年かな。まだやりたいと希望する場合は任期を延ばすくらいで、せいぜい4、5年が限度になっていますね。この方の場合、28年もいましたからね。しまいには王様のお付きみたいになった。本を書いているかもしれない⁵。

— それくらい長く行っているのはかなり珍しい例ですか。

小崎 珍しいでしょう。

— そこまで外国に貢献されたということですから、日本にとっても大切な方ですね。

小崎 そうですね。

— ほかに技術協力課長としてやられたプロジェクトはありますか。あるいは、その後すぐにご病気になられてしまうのでしょうか。

小崎 そうですね。

— 技術協力課長は何年くらいやられましたか。

小崎 1年半くらいです〔1967年1月から1968年3月まで〕。技術協力課は

⁵ 西岡京治『神秘の王国』（学習研究社、1978年）や、中尾佐助・西岡京治『ブータンの花』（朝日新聞社、1984年、2011年に北海道大学出版会から新版として出版）などがある。

おもしろいところだったから、もっと長くいたかったけれども、出血しましてね、これはだめだと言われました。

■ 病気療養、文化事業部への異動

小崎 病気は胃と腸ですね。十二指腸潰瘍でした。技術協力課は JICA を持っていて、JICA にはお医者さんがいっぱいいますから、「どこがいいだろうか」と相談したら、国立東京第一病院になりました。あの頃は第一と第二とあったのですが、今はないですかね。そこへ入って手当しろと言われました。そして入ったら、内科的療法で治せると医者たちが言っていました。だから手術せずに抑えたいけれども、その後ずっと症状は続いたのです。出血は止まったのですが。

— 入院されたのですか。

小崎 入院しました。

— 長い間入院されたのですか。

小崎 そうですね、1 ヶ月くらい入っていましたかね。その頃はまだよかったけれども、2 回目の入院で腹を切ったのです。

— では技術協力課長を 1 年半やられて、1 ヶ月ほど入院されて、すぐに文化事業部に移られたのでしょうか。

小崎 そうです。

— 技術協力課長には戻られなかったのですね。

小崎 入院したのがちょうど予算編成期で、私がいけないといけなのだけでも、どうにもならない。やむをえず、局長に次ぐ専任の課長に頼んで私は入院しました。予算のことを考えているひまもないほど出血がひどくて、倒れてしまいましたから。

— その後に文化事業部に移られる。この部は戦前から続いていると考えてよろしいですか。

小崎 ええ、そうです。文化事業部は一課、二課とありました。ここは経済協力局と比べると規模は小さいのですが、資料で確認したところ一課が 8 名で二課が 11 名でした。私は二課でした。二課は具体的に何をしていたのかというと、人材交流ですね。人材の派遣や受け入れです。スポーツ選手や学者を受け

入れて、日本で教育する。そして派遣を要請されれば人を出す。専門家を出して、現地で実習をやらせる。

— 一種の広報活動のようなものですか。

小崎 広報活動です。先ほども申しましたが、二課は千客万来で、朝から晩までわいわいとやっていた。お茶の流派があるでしょう、四派のお師匠さんと仲良くなって、しょっちゅう呼んでくれるのですよ。一緒に食事をしたりしました。勅使河原さんとか、なかなかのお偉方がいました。

毎年、外務省は年の暮れになるとカレンダーを出しています。カレンダーには四派が全部名前を入れてありますよ。下にも裏側にも全部名前が入っているのです。毎年世界に向けて出しているのです。個人で必要な分は今でも買っていますよ。人にあげると喜ばれましてね、活け花を知っている人はすごくいいと言うのです。花だけを活けた場合の活け方が、それをみるとよくわかると言うのです。

— 海外との人材交流をやっている省庁は外務省だけですか。

小崎 最近では他の省庁でもかなりやりだしたようですが、昔から外務省が一番よくやっています。

— これだけの人が文化事業部に来るということは、外務省が中心だったということでしょうか。

小崎 ええ。本当に朝から千客万来でした。

— どういう方がいらっしゃったか覚えておられますか。

小崎 スポーツ選手とか学者とかね。活花や能、柔道も多かったです。

— 60年代後半というとは何でしょうか、野球あたり…。

小崎 野球はまだ、もっと後ですね。

— 相撲の海外興行はずっと後ですか。

小崎 それは当時はなかったですね。話しは飛びますが、後にポーランドに行った時に、サッカーの選手で一番優秀な選手をトヨタが日本に招待したのです。トヨタカップですね。その地域の優秀なチームを日本によんで試合をさせて、勝てば賞品などを差し上げる。その頃はポーランドがヨーロッパにおける優秀なチームの一つだった。それで日本に来て、何回か試合をした。ところが来た選手がみんな飛行機で逃げちゃった。日本で試合をやった後、帰る段になっ

たら逃げた。そういう国でしたよ。もう隙あれば逃げようとしていた。

— 捕まったのですか。

小崎 そこまでは知りません。

— 芸術家などは文化事業部に來られていましたか。

小崎 芸術家もいましたね。あと何があったかな。

— 歌舞伎とか能とか…。

小崎 能はあったかな。

— 映画とか。

小崎 映画はやらない。外務省が PR の映画を持っていたから。カナダではよく映写機をもって歩いていましたよ。

— 当時は国際交流基金はもうあったのでしょうか。

小崎 もうありましたね。まだ小さいものでしたけれど。

— 戦前にあった国際文化振興会は、文部省が管轄していました。こういう海外との人材交流事業の中心が、戦後になると外務省に移って行くというのは面白い歴史ですね。

小崎 その頃はよくラジオの放送を頼まれて、交流基金の PR をしたこともありました。どこかの国で農業協力か何かをやっていて、大雨が降って田んぼが水につかって、自分自身が流される所を一生懸命つかまって、その田んぼを守ったとか、そんな話をしました。

— 文化事業部時代はお身体の具合はどうだったのですか。

小崎 悪かったです。

— ではずっと気をつけながらお仕事をされていたのですか。

小崎 もととの発端を言えば、インドからカナダに移る頃にはすでにおかしかったのです。インドからカナダに行くことが発令された時、もう腹が痛くてしょうがない。それで行くのが1ヶ月くらい遅れた。カナダでは何かあればすぐ手当ができる。それでカナダでは何とか抑えて、日本に帰ってきた。そして、技術協力課の時くらいからひどくなってきた。それで治療してから、文化事業部に行ったのです。

— 文化事業部にいたのは2年くらいですか。68年の夏か秋に文化事業部に移られたということでしょうか。

小崎 2年はいましたね〔1968年3月から1971年1月まで情報文化局文化事業部文化二課長〕。

■ 繊維交渉の渦中に身を投ずる

— その後、通産省に移られるのですね。

小崎 実はその時、海外に出ろという話しがあった。でも体調が不安でしょうがなかったから、延ばしてくれと言ったら、では通産省に行けという。

— 通産省の一番忙しいところですね。

小崎 一番忙しい。えらい目にあった。

— 海外に行くというお話しは、具体的にどこかの国へ、というお話だったのですか。

小崎 どこでもいいんですよ。人事課長が「どこか行くか」と言ってきてだけです。まあ香港とか、その近辺だね。私は、「何かあった時にすぐ手当ができる場所でないと安心できない」と言ったのです。

— それがまさかの通産省。繊維雑貨局ですね。時期はいつでしょうか。

小崎 昭和46年の1月です〔1971年1月通産省繊維雑貨局繊維雑貨輸出課長に就任〕。

— 繊維交渉も大分進んだころですね。

小崎 もう終わりの頃ですね。

— 辞令をもらった時にはどういうお気持ちでしたか。

小崎 まあ私はわからないから、のんびりやろう、という調子でいったのですよ。そうしたら、えらいことになった。

— 当時通産省の局長はどなただったですか。

小崎 局長は誰かな…〔楠岡豪〕⁶。

— 通産大臣が宮沢喜一さんの頃ですか。

小崎 宮沢さんがいて、すぐ田中角栄さんに代わるのです。

— 大使ご自身は、それまで全く繊維交渉に関係されていなかったのに、いきなり繊維雑貨局に赴任されたわけですね。

⁶ 『昭和45年度通商産業省年報』および『昭和46年度通商産業省年報』の「人事および異動」を参照。

小崎 そうです。繊維雑貨輸出課長は、当時はずっと外務省から出ているのです。私の前は、1年上の和智さん〔和智一夫〕⁷がいました。外務省出身の課長は、私で終わりになりました。私が病気になったから、通産省は、もうこれで終わりにしようと思ったのでしょう。

— 繊維交渉がああいった状態になっているというのは…。

小崎 部外者だからよくわからなかった。行ってみたら大変なことになっていた。繊維産連という、繊維産業連盟、これは当時の日本の輸出産業の中枢の人たちです。鉄鋼や自動車などよりは、繊維が幅を利かせていた時代ですからね。

— 日本の輸出の40%くらいが繊維だった…。

小崎 ええ。

— 繊維産連とは日常的に接触されるわけですか。

小崎 もうしょっちゅうですよ。繊維産連が私たちの部屋に入ってきて、どちらか通産省かわからないような状況だった。それはもう大変でした。

— 有名なのは谷口豊三郎さんですね。谷口さんは来られたのですか。

小崎 谷口さんは来ない。事務局が来る。寒いころでしたけれどね、これはえらいところに来たと思った。もうずっと作業が、交渉が続いていましたから。それで佐藤総理とニクソン大統領の日米会談で、この時は繊維問題は共同声明に入らなかった。そのうちに会長は谷口さんから大屋さん〔大屋晋三〕に代わった。

— 大使はずっと国内にいらしたわけですよ。昭和46年は…。

小崎 46年はいました。

— 具体的には繊維産連との話し合いですか。

小崎 そう。繊維産連とアメリカ側との話し合いが、ずっと続いていていろいろあったのですが、綿製品についてはすでに協定ができていたのです。その他の毛や合繊やアパレルなどは日本側が輸出していたのですが、それにアメリカ側が非常にこだわって、規制をやってくれという強い要請がありました。それに対して繊維産連は絶対に屈しないと。政府に対しても強硬な物言いをする。アメリカに対してもそうでした。私たちは微妙な立場でしたよ。

⁷ 『昭和44年度通商産業省年報』の「人事および異動」を参照。

— 通産省としてはどういう立場だったのですか。どちらかというとな業界寄りですか。

小崎 業界寄りです。それは絶対に折れないとっているから。

— 宮沢さんは、その頃にはもう業界を支援する側に立っておられたのですか。大使が就任される前の昭和 45 年に「宮沢構想」を出されますよね。1 年くらいは規制するけれども、あとはしないという玉虫色の構想です。それで、昭和 46 年 1 月には自主規制をすると宮沢さんが言いましたが、業界は大反対でしたね。

小崎 そう。宮沢さんは、はじめは自主規制に賛成していたのです。

— ちょうどその渦中に通産省に行かれたわけですから、それはもう大変ですよね。外務省も大変な立場でしたか。

小崎 通産省も繊維連もあれだけ反対していましたから、一方的には物を言えないですよ。

— 考えるだけで困難な交渉ですね。実際に自主規制をするという宣言の作成・協議に関わられたのですか。

小崎 それは大いに関わりました。

— 当時の駐米大使は牛場信彦さんですね。牛場さんもずいぶん苦労されたのでしょうか。

小崎 ええ。牛場さんとはカナダでも一緒でした。

— 話しやすかったですか。

小崎 あまり突っ込んで話す機会もなかったですね。

— 昭和 46 年になると、政府間協定を結んでくれというアメリカからの要求は強かったのでしょうか。アメリカは、自主規制ではなくちゃんと協定を結べと言っていた…。

小崎 そうです。仕方ないから我方で一方的に自主規制をやったのですよ。

— 大使はその協議に関わられていますね。

小崎 ええ。発表した翌日にアメリカが反対してきた。初めから問題にならないかということで、それからまたゴタゴタとやったのですが、アメリカを相手に交渉するというのは大変なこと。むこうの要求は大きいものから。それでそのうちに、田中角栄さんが通産相になられました。田中さんは

話しが早いですよ。自主規制がだめなら、アメリカの話しを聞いて、むこうの言うとおりにやれ、ということなのです。

— 田中さんの時に、自主規制をするにあたっての救済措置を決定しますね。これにも大使は関わられますか。

小崎 私はそこまではやらなかった。

— なかなか宮沢さんは、ここまでやる気力はなかったといひましようか、田中さんが通産大臣になられてから、ケネディ大統領特使がやってきて、政府間協定でやりたいという意向で…。

小崎 日本には来ないですよ。どこかの島でした。

— 繊維業界としては、規制されてはたまらない、何とか譲歩してもいいけど、本当はしたくなかったでしょう。大使は田中通産大臣とは会われましたか。

小崎 いえ、顔をみるくらいでした。とにかくあの方は、お客がものすごく多い。外来者が、部屋に入りきれなくて、廊下にずっとならんでいる。それで田中さんが出てきて握手してまわる。大臣の部屋の外で。それは大変な人でしたよ。

— 新潟では神様のような存在です。田中さんのおかげで新幹線も通りました。

小崎 ああそうですか。そうですね。

— すごい政治家ですよ。迫力といい…。

小崎 本当だね。何かやるとなったら、馬力がありますからね。私は、よく正月にあいさつに田中さんのところに行った。しまいには行かなくなったけれど、それでも物を送ってくれる。新潟のお漬物などを送ってくれました。

— あのエネルギーはどこから出てくるのでしょうかね。

小崎 本当にそうだね。中国との国交も始めたし。あれは外務省にも政界にもいろいろ反対もありましたけれど。田中さんは、橋本恕という、この間亡くなりましたが私より 1 年上で中国課長をやっていた方に、「お前だけはおれの言うことをきけ」と言ったのです。橋本さんは他には誰にも言わないで、一人で走りまわっていた。

— 繊維交渉の際に、田中通産大臣と一緒に働いていた方はどなたですか。

小崎 通商局は、アメリカに同調するのはいやだという雰囲気でした。通商局

には審議官がいたのですが、よく紙切れ一枚に図面を書いていたよ。というのは、田中さんに三枚もある分厚い資料を持っていくと破られてしまうから。一枚に図面で書いてこいと言われる。

— 文書ではなくて、図に書いてこいとおっしゃるのですね。

小崎 ええ。そうでないと田中さんは気に入らない。その後、ワシントンで繊維協定に正式に調印しました。ただ、日本側が正式に折れたわけではない。だから、繊維交渉の調査をしてこいと言われて、私が現地に行きましたよ。1ヶ月くらいワシントンにおりました。

— この後に行かれたわけですか。それはどこでも調べられませんでした。協定の調印で終息したわけではないのですね。

小崎 調印はしたけれどもね。大勢はもう決まっていたからもうしょうがないけれど、全面的にOKというわけではない。それでその後、私たちが行ったわけですよ。

— 具体的に何をされたのですか。

小崎 細かい協定文の詰めですね。繊維産連もついてきましたよ。ホテルも同じところでした。アメリカ側と交渉して帰ってくると、毎日夜にやってくる。いろいろ繊維産連の意向を話してきた。

— 何人くらいで行かれたのですか。何十人と行くわけですか。

小崎 いえいえ、そんなに多くはない。通産中心に行くわけですが、現地では外務省の人間も毎日顔を出していましたよ。

— どなたが行かれたのですか。

小崎 大河原さん〔大河原良雄〕。

— 大河原さんが大使館から行かれたのですか。

小崎 ええ。

— 通産からはどなたが行かれたのですか。

小崎 もう正式に調印していましたからね、私だけではなかったでしょうか。

— 繊維産連で、アメリカにずっと詰めている人もいたのでしょうか。

小崎 いたでしょう。

— アメリカに行かれたのは昭和47年の1月ですか。

小崎 1月か2月。最後の2カ月間は毎日国務省に行きました。

— 交渉相手は誰だったのですか。

小崎 参事官レベルの人間でした。

— 大使が交渉の代表ですか。

小崎 日本側の代表です。もう何を言ったか覚えていませんが。どうせもう大本は決まっているから、細かいことを言ってもしょうがないのですよ。それでも、少しでも織産連の言い分を通せということなのでしょうが。

— 大使がアメリカにおられた 2 カ月間は、具体的には何をされていたのですか。

小崎 条約の詰めです。文言の詰めです。

— 正式な文書を、修正文書として出してワシントンでのお仕事は終わりですか。

小崎 何か書いたものを出したと思いますかね。でもすでに正式に調印されているわけですから、付け足しですよ。

— 昭和 46 年、47 年というのは激動の時代ですよ。ニクソンショックがあり、日本の政局も佐藤首相から田中首相に代わる頃です。そういった中で繊維交渉も行われました。後から歴史を研究するにはおもしろい時代です。

小崎 その頃に渦中にある者は大変ですよ。

— お身体の調子は交渉している間もずっと悪かったのですか。

小崎 悪かったです。だから帰ってきてすぐですね、二回目の入院したのは。今度こそ腹を切れと言われて。

— [大使が日記を見ておられることに対して] それは病気の時につけられていたのですか。

小崎 病気のときはもちろん、そうでないときもつけていました。

— お仕事のメモでもあるのですか。貴重ですね。

小崎 ええ。当時は国内出張もしていますね。

— 日記をつけられるのは習慣だったのですか。

小崎 習慣にしていたけど、病気でつけられなくなったから、後でまとめて書いたりしていました。いろいろな時代をめちゃくちゃに書いてある。

— ワシントンでの交渉の時のことも書いてあるのですか。

小崎 書いてない。書いておけばよかったけど。

— 二回目の入院も同じ病院ですか。

小崎 ええ、同じ場所です。二回目も前回と同じ場所でしたから、親切にやってくれた。

— 昭和 47 年 4 月に入院されたのですか。

小崎 そうですね。

— 今度は少し長かったですか。

小崎 2 カ月くらいですね。家に帰ってから大分療養をしなければならぬと言われました。本当は病院にいたかったけれど、いさせてくれなかった。

— 大使の講演記録を拝見しますと、次はシンガポール勤務になりますが、少しブランクがありましたか。

小崎 シンガポールに行く前に外務省の研修所に行きましてね。あそこは、あまり仕事をガンガンとやるところではないから、指導だけしておりました。あそこはよかったです。仕事のないところにいるのは非常によかったです。

— 研修所はどこにあったのですか。茗荷谷…。

小崎 大塚。駅前からバスで行く。古い建物です。今は変わっています。

■ 繊維交渉余話

— 繊維交渉に関しまして、もう一点、追加でお聞きしたいことがございます。大使は繊維交渉の際に、繊維雑貨輸出課長として関わっておられたわけですが、大使が赴任される半年ほど前、宮沢通産大臣の時代に交渉がいったん決裂していますね。大使が赴任された際の通産省の空気はどのようなものだったのでしょうか。

小崎 その時は織産連が中心になっていて、大手企業は全部そこに入っていました。丸紅から三井、三菱まで全部です。その織産連が旗を振って、アメリカの言うことなんか絶対に聞くなと言うのです。絶対反対だと。そういう主張があった。私が課長になったころには、アメリカなんか何するものぞといった空気で、日本の意向を中心に繊維交渉を解決するべきだと言われていました。

綿製品については取り決めができていましたが、それ以外のものは全部日本で案をまとめる必要がありまして、それは大変なものでした。いつも夜中まで拘束されて、マスコミにも追いかけられました。

その作業自体は、私というよりは通産の参事官が審議官が中心となってやっていたから、私は裏側で繊維協定をつくるための地ならしをやれといわれて、毛糸や絹といったものを各品別に日本の業者を全部入れて、まとめる作業をしていました。それを持ち寄って、繊維交渉の基礎にしたのです。そうやってやっと作った案だったのに、ニクソン大統領からあっさりノーと言われた。それからアメリカから別の案をつくれと言われました。

そうこうしているうちに、田中角栄さんが大臣になられ、交渉に取り組みました。田中さんは国内を精力的にとりまとめられて、新たな案を作りました。すると、アメリカもその案ならいいだろうと言い出して、交渉を再開して、ようやくケリがついたのです。とにかくひどい交渉でしたよ。

—— 大使は業界ごとに案をまとめる仕事をされたのですか。

小崎 自分がやるわけではないのです。業界ごとに、それぞれこの範囲内でやってくれと伝えて業界にまとめてもらう。でもなかなかまとまらない。それを無理やりにまとめて、発表まで漕ぎつけたけれどもアメリカ側がノーを突きつけて来た。

—— 大使は繊維交渉全般をどのように評価されていますか。

小崎 日本の負けですよ。当時は、日本の輸出品目の中で繊維が一番勢いのあった時代です。鉄鋼や自動車ではなかった。だから、繊維連の影響力はかなりのものがありました。私がワシントンに滞在していた時にも、宿泊先に繊維連の人が訪ねてくるのです。その日のアメリカとの交渉内容を聞きにくる。こちらとしては、話せることと話せないことがありますからね、対応するのは大変でしたよ。

—— 田中角栄さんが通産大臣になられて、繊維交渉は解決に向かったわけですが、繊維業界には補償金が支払われたと思います。大使は支払いに関わられたのでしょうか。

小崎 関わっていません。そういったことに関われるものではありません。

—— 完全な政治決着だったのでしょうか。

小崎 そうです。どういうお金が払われたのか我々も知りません。田中さんは、繊維連の人が家に訪ねてきても、一人一人に会っていました。一度会った人のことを田中さんは忘れない。非常に頭のいい方でしたから、一度聞いた名前は

忘れない。すごい方ですよ。義理堅い人です。

— 沖縄と繊維が関係しているということは、お仕事をされていて感じられていましたか。

小崎 直接は感じなかったですね。「その話はしてはいかん」ということでした。ただ、黙っていても関係があると見られるような状況ではありましたね。

— アメリカにはアメリカの事情があるというのは、交渉では当たり前のことですからね。本当に繊維交渉というのは難しい交渉ですね。研究対象としてはおもしろいのですが。

■ 接收資料の返還をめぐる

— 最後に、これまでのお話では触れられていない点につきまして、いくつか補足的にお聞きしたいと思います。

大使は、その後の日中国交正常化のプロセスには直接タッチされなかったのですか。

小崎 ええ、私は他のところに行っていましたからね。先ほども言いましたように、橋本恕さんが田中さんに言われて動いていました。

— 東亜同文書院を出られて、中国にご関心が高かったと思いますが、大使のキャリアを拝見しますと、少し違う道に進まれたといたしますか…。

小崎 我々は戦後、同文書院の名前を出すと非難されました。「お前らは帝国主義の手先だ」と言われた。ところが、それがだんだん年と共に薄れてきました。だんだん見方が変わってきています。我々卒業生が、ほとんどいなくなってしまった今頃になって、本当の姿を見てくれるようになったという感じですね。

— 戦前の日中関係を語るにあたり、ずっと帝国主義云々と言われてきましたけれど、我々の世代は、従来とはちがう見方で研究しないと、見えないものがたくさんあるのではないかと考えております。

小崎 そうですね。

— 戦後も同じで、日本とアジアとの関わりもやはり見直す必要があると思いますね。

小崎 ええ。

— そうでないと、今日うかがったお話しから考えても、日本とアジアはこ

んなに密接にならないと思うのです。

小崎 ええ、そうですね。

— 大使のお話しかから、アジアで現地の発展に身を投ずる、そんな日本人もいたのだなと教えられました。こういった事実も、戦前の日本とアジアの伝統を考えないと説明できないですよ。私が在籍している大東文化大学も中国と関係のある大学ですが、愛知大学ほどには資料は残っていません。

小崎 我々も資料は相当現地に残してきました。戦後、資料は北京の方に持っていかれて、今は北京の国立図書館の倉庫の中に入っているのです。だから、それを返してくれと私も三回くらい行ったのだけれど、だめだと言われた。紙が弱いから、ぼろぼろになってしまうからと言っても向こうはノーと言う。

— どういうものが残っているのですか。

小崎 調査報告書ですね。

— 大旅行のですか。

小崎 それもありますが、他の調査報告もある。

— それは貴重ですね。

小崎 貴重です。

— 北京ですか。

小崎 北京です。

— 第一档案館ですか。南京にあるのが第二です。

小崎 第一かな。私は三回くらい行きましてね。それで中国側のナンバーツーとは「ツーツー」なんです。そのナンバーツーは返してやると言うけれども、その上の大臣がだめだと言うらしい。愛知大学も機会があったら主張すると言っているのですが、最近の日中間の雰囲気がこの状態ですから、言ってもだめだということでしょう。

— 日本にいる中国人の研究者も、中国に行って資料を見られないそうです。日本にいること自体がだめだと言われるとのこと。国籍が日本だろうが中国だろうが、日本にいることがだめだということです。

小崎 ああ、そうですね。

— 中国に接収された資料は、東亜同文書院のもの以外にもあると思いますから、本当に貴重だと思いますね。黒龍江大学の図書館も満洲国関係の資料な

どをもっています。以前は少し閲覧できたようですが、今は全然見られなくなっているようです。日本人が戦前の中国をどう見ていたのかを調べたら面白い研究ができると思うのですが。中国に行っても資料を見ることができませんからね、それが最大の問題です。中国に対して帝国主義的な考え方を持っていた人もいたでしょうけど、そうではない人もいたでしょうから。それを書くには、やはり資料を使わせてくれないと研究できません。

小崎 そうですね。

— 中国にとってもマイナスだと思います。

小崎 そのとおりです。だから私は、北京の図書館に行った時にも「コピーが必要ならあげます」と話したのです。日本でコピーをとって差し上げます、と。でも、それはだめだということです。そんなことを言っていたら、お互い研究したくてもできないのにな。

— それが使えるようになったらおもしろい研究ができますね。

小崎 ええ。

— ここでいったん終わりとさせていただきます。我々の方で原稿をまとめさせていただいて、大使にお送りして筆を入れていただきたいと思います。これまで長期間にわたり興味深いお話を賜り、本当にどうもありがとうございました。

第6回

・日時：2016年9月23日 13:00~17:00

・場所：愛知大学東京霞が関オフィス

・インタビュアー

金子貴純（大東文化大学大学院法学研究科博士課程後期課程）

— 前回までに、通産省で繊維交渉に従事されたところまでのお話しをお伺いいたしました。本日は、これまでのインタビューでお聞きできなかった諸々の点につきまして、テーマや時系列にこだわらずにお話しいただきたいと思い、追加でこの場を設定させていただきました。どうぞよろしくお願い申し上げます。

■ 東亜同文書院出身の「支那通」たち

さて、東亜同文書院からは、多数の「支那通」が輩出され、様々な場で活躍されております。まずはそういった「支那通」についておうかがいします。大使は、ご講演の中で東亜同文書院出身の中山優さんについてお話されていますが、直接お会いになったことはございますか。

小崎 会いました。

— どちらで会われたのですか。

小崎 外務省で会ったり、お宅へ伺ったりしました。中山さんは戦後、外務省によく出入りしていたのです。あの方は、本当にパンカラと言いますか、弊衣破帽でね、頓着しない方でした。しかし、非常に立派な方ですね。いろいろと教えられました。

— 中山さんは同文書院を正式には卒業されていませんね。

小崎 卒業はしていませんが、卒業した者より立派だと根津さんに言われていた。

— 海軍の津田静枝さんのことはご存じでしたか。

小崎 津田さんからお話しをうかがったことがあります。同文書院に入った時に行われた東京での会合で、書院のお偉方がいろいろ講演してくれたのですが、津田さんもその中の一人でした。それくらいですね。その後、我々は上海に行きましたから、直接はお会いしていません。

— 同文書院出身の方は、吉岡文六さんや田中香苗さんなどをはじめ、ジャーナリズムの世界でも多数活躍されていますね。ご存じの方はいらっしゃいますか。

小崎 田中さんには会いましたよ。会ったのは一、二回ですけど、豪放磊落な方でした。同文書院から新聞社に入った人は本当にたくさんいた。

— 新聞界に入られた方々は、外務省や軍と日常的に接点を持っていたのでしょうか。

小崎 あったでしょう。外務省との関係はありましたよ。昔は、中国に日本人が経営していた漢字新聞がありました。日本人が書いた漢文の新聞社が中国に進出していた。中国人読者に歓迎されて、発行部数が急増したのです。順天時

報などが代表ですね。それから、日本の新聞にも、同文書院の同窓は中国問題専門のエキスパートとして処遇されました。東亜部長や論説委員などになり、中国問題で論陣を張った。その中に、朝日新聞論説主幹の大西斎、毎日新聞編集局長の吉岡文六、大西さんは八期、吉岡さんは十九期かな。それから田中香苗さんもいた。田中さんは二十五期です。

■ 時代に翻弄された「同文書院イメージ」

小崎 他にもたくさんいますよ。どこに行っても同文書院出身の人材がいた。前にもお話したとおり、同文書院の学生は大旅行に行くでしょう。その時にもっていくのが同窓会の名簿です。お金はほとんどもっていかない。どこに行っても、行った先には必ず同文書院の先輩がいたからです。お互い全く知らないのですが、「よく来たな」と迎えてくれる。「食事していけ」とか「泊っていけ」と言ってくれるのです。先輩が大事にしてくれる。ああいう大学はもうないでしょうね。私は非常にいい印象をもちました。あんな素晴らしい大学はないな、と今から考えてもそう思いますよ。

— お話をうかがっておりますと、非常にうらやましく感じます。今は、先輩がそこまで後輩の面倒をみるといった気風はないように思います。

小崎 本当にそうですね。私の大旅行の際に、蒙古まで入ろうとして、包頭まで行った時のことです。さらに奥までは行けないから、張家口か大同まで戻ってきた。そこからもう一度蒙古まで行こうとしたのですが、交通機関がない。

そうしたら、たまたま同文書院の先輩がいたから、訪ねてみました。すると、奥さん共々とても親切で、「泊っていけ」と言ってくれた。出発するまで二、三日ありましたから、その間泊めてくれた。ただ、出発の日がたまたま大雨で、「これはとんでもないだ」ということで行くのはあきらめました。まあ、面倒をみてくれる方がたくさんいました。北京に行けば、大使館に先輩がいましたから何日でも泊めてくれる。本当に親切でした。

— それが同文書院の魅力ですね。ただ、戦後になりますと、同文書院に対する一般のイメージも変わっていったように思います。その点はどのように感じられましたか。

小崎 戦後の同文書院に対するイメージは悪かったですよ。「スパイ学校」と言

われたりね。スパイのスの字もないのに。戦前は、同文書院と、となりの交通大学と一緒にスポーツ大会をやっていたのです。非常に仲が良かった。

それが戦時中に交通大学は重慶に行ってしまった。一方で、同文書院は校舎を三日三晩焼かれてなくなってしまったから、となりの交通大学の敷地を借りて入ったのです。戦時中でしたから、そこには避難民が数万人いました。結局、我々はそこに入りました。そして戦後になると、交通大学が「返せ」と言ってきました。それからは、関係が悪くなってしまっただけね。昔はあんなに仲が良かったのに。それからは、ずっとそういう関係が続きました。戦後になってからも、同文書院のシンポジウムをやると、我々はひどく批判されましたよ。

—— 批判するのは日本人ですか。

小崎 中国人です。「スパイ学校」と言うのです。そんなことは全くないと我々は言いつづけてきました。すると、最近ではだんだんと理解が進みまして、今では我々に味方してくれるようになりました。「同文書院はいい大学だ」と評価してくれています。

—— ようやく真意が理解されたんですね。

小崎 ええ。中国側が我々のことを理解してくれるようになりました。

—— 日本人からの評価はいかがですか。

小崎 日本人の半分くらいからは、かなりひどく言われました。同文書院というのは、いわば何もない泥沼のようなところから、一からつくられた学校です。だから、酸いも甘いも辛いも何もかもわかる人材が育った。教授以下、全員が学校内に住んで切磋琢磨していた。そういう学校であることを知っている人はわかってくれるけれど、知らない人からはかなり批判されました。

あと、同文書院の中には病院がありました。院長も医者も看護婦もすべて日本人です。寮長も日本人。ただ、中国人もいました。食堂で料理を作ったり、おかしを作ったりしていました。昔から勤めているから、日本人とは親しくて、我々とも仲が良かったのです。それが戦争のせいで、みんなバラバラになってしまった。中国人にもいい人がたくさんいましたけど、戦争で意思が通じなくなってしまいました。

—— 同文書院で働いていた中国人の方たちは、日中戦争が始まってからも書院で働いていたのでしょうか。

小崎 そうです。学生はたくさん食べますから、だれかが食事の準備をしな
といけません。ただ、戦争も終わりのころになると、肉や魚や野菜がなくなっ
てきてね、その分、寮の食堂ではかぼちゃが出るのです。かぼちゃは体にいい
んですよ。ただ、学生たちはかぼちゃを食べさせられて文句を言っていました
が。

■ 日本人の中国認識をめぐる

— 戦時中に、同文書院の学生が日本国内を講演してまわったそうですが、
何かご存じのことはございますか。

小崎 我々より上の世代の方たちがやっていたようです。当時の日本人は、中
国のことを知らなかったから。中国とは一体どういうものなのか、というこ
とをよく知らなかった。だから講演してまわったのです。ついでに同文書院の紹
介もしていました。それを夏休みに、九州から四国、中国、東北と班を分けて
やっていたのです。

— かなり大々的にやっていたんですね。

小崎 そのとおりです。映写機も持っていきました。

— それは学生が自発的にやったのですか。それとも学校としてやったので
しょうか。

小崎 学校としてやりました。

— それは日本人の中国認識が不足しているという理由からですか。

小崎 ええ、そうです。

— 日本人の中国認識が不足していることに対して、同文書院の学生はどの
ように思っていたのですか。

小崎 それは苦々しく思っていました。大いに日本人を啓蒙しないといけない、
という意識を強く持っていました。豊橋の中学校で、同文書院の学生が映写機
をもって話しにいったことがありました。その学生は講演を四時間も続けたの
です。すると、それ以降は新聞記者がついてまわる。それくらい当時は人気
があったんですね。

— メディアがついて回っていたということは、当時の新聞に掲載されてい
る可能性もありますね。

小崎 そうですね。

—— 「日本人の中国認識が足りない」ということの具体的な意味、内容はどのようなものだったのでしょうか。例えば、中国人の国民性に対する認識が足りないといったことなのか、蒋介石、国民政府による統一が進んでいることに対する現状認識が不足しているといったようなことなのか…。

小崎 何もかもです。知識が何もかも足りない。36年に西安事件があったでしょう。その時も日本の新聞はということなのか理解できなかった。それで同文書院出身者が、記事の内容の正否を判断し、主張したのです。若杉要さんがそうです。

—— 西安事件の際に、日本はかなり混乱して情報をとれていなかったのでしょうか。

小崎 そのとおりですね。

■ 外交官としての信念

—— 最後にお聞きしたいのが、大使の個人的な信念についてです。大使が外交官としてお仕事をされるにあたり、心がけておられた信条はありましたか。

小崎 あります。外国から日本がどう評価されているかという点を常に心に置き、そして、日本の国力をどうやって高めていくか。こういった点は心がけていましたね。国力を失墜させてはいけません。これを第一に考えていました。

—— 外交官時代に一番大変だった時代はいつでしたか。

小崎 いつも大変だったけれど、繊維交渉は特別だった。のんびりできたのは、カナダや台湾かな。あとシンガポールも大変だった。インドも大変だったけど、面白かったですね。ポーランドは日本をひいきにしている国だから、いい国でしたね。音楽も素晴らしいし、人もいいですからね。

あと日露戦争で日本がロシアをやっつけたから、日本人に敬意を払ってくれる。ポーランドという国がなかった時代ですからね。日露戦争の時に、ポーランド兵も動員されたのですが、捕虜になって日本に収容されたのです。その頃はまだ武士道精神が残っていたから、日本の対応が素晴らしかったのでしょう、非常にいい印象を日本人にもっていましたよ。

それから宗教的に寛容でして、日本人が教会を訪ねると、地元の人が「どう

ぞどうぞ」といって歓迎してくれるのです。とにかくポーランドはいい国でした。ポーランドには一度行ってみるといいですよ。ルーマニアもいい国だけど、独裁者がいたからね。

— チャウシェスクの時代ですね。

小崎 そうです。

— 子供の頃に、チャウシェスクが処刑されたニュースを目にした記憶があるのですが、なぜあそこまで恨まれたのでしょうか。

小崎 彼は独裁者ですからね。元々は国民のために努力していたのだけれど、二十年以上権力を握っていたから、だんだんと変わっていった。奥さんもそうですね。あの頃は、周辺諸国の自由化が進んでいる中で、ルーマニアにだけ独裁体制が残っていた。それで民衆が立ち上がったのです。

彼は奥さんと一緒にヘリコプターで逃げました。途中で降りて、それで見つかってしまってね。彼にとって味方だった者たちが敵に変わっていました。捕まってからも、自分は悪いことはしていないと主張したけれど、誰も聞いてくれない。最後はどうとう銃殺されました。

私もチャウシェスクには何回も会いました。我々と会っている間は、何てことのない人物なのですが、国民にとっては苦難でした。ある日、外へ出てみると、国民がみんなカバンをもって歩いているのです。何だろうと思ってみると、買い出しです。みんなずっと並んでいるのです。物が不足していたから、途中で売り切れる場合もある。そういう場面を何度も目撃しました。

— それが民衆の不満につながるわけですね。

小崎 そうです。

— 最後のご質問にさせていただきます。大使が人生において一番影響を受けた人物はどなたですか。同文書院の先覚たちでしょうか。

小崎 根津さんになるかな。根津さんはもう亡くなっておられたけど、非常に立派な方でした。同文書院に入ってから、根津さんについてはいろいろと話しを聞きましたよ。本当に立派な方だったのです。

— これまで長時間にわたりお話を賜り、本当にありがとうございました。心から御礼申し上げます。このインタビューが掲載され次第、大使にお送りさせていただきます。追加でおうかがいしたことがございましたら、改めてご連絡

絡させていただきます。どうもありがとうございました。